

<受付>

都会音

アナウンス 15秒 M1

照合 OUT 合

板付

音量ダウン

事務机がひとつ、椅子が二つ。照合

一つは事務員用、一つは来客用である。

女1が現れ、事務机の上に「受付」の札を出し、机の上の事務用品の整理を始める。

女2がやや迷いながら現れる。

えーと、ここですか、受付は・・・?

(やや怪しみつつ)そうですよ・・・。

(大天)

実は今、そこだろうかってきたのですが・・・。

待ってください(仕事を始める)。

何ですか・・・?

待ってくださいって言うてるじゃありませんか、まだこの整理がついていないんですから。

わかりました。それでは、と・・・ここで待たせてもらっていいのかしら。

何です・・・?

いえ、ここで待たせてもらっていいのかどうかと思ひまして・・・。

それは質問ですか?

女1

女2

女1

女2

女1

女2

女1

女2

女1

女2

都合

M1

女2 質問・・・？いや、質問っていうか、私はただ・・・。

女1 あなた独身ですか？

女2 え？何ですか？・・・いえ、主人と子供が四人おりますけど・・・

何ですか？

女1 四人？あなた子供を四人産んだって、今そう言いました？

女2 言いましたけど・・・。

女1 少しは反省したらどうなんです。

女2 反省って何です？

女1 産みすぎですよ。四人なんて。世界の食糧事情がどうなっているか、

考えてみたことがあるんですか？

女2 そりゃそうですね・・・私たちのほうにだって事情があったんで

すから・・・。

女1 どんな事情です？

女2 まあ、いいじゃありませんか。そんなことは・・・。

女1 いいえ、言ってみてください。どんな事情なんです？

女2 いえ、たいしたことじゃありませんよ。ただ、最初生まれた子が女

の子だったんです。それで・・・。

女1 わかりました。あなたは男の子が欲しかったんです。ところが二番

目の子も女の子だった。そうですね？

女2 ええ、まあ……。

女1 三番目の子も女だった。

女2 はい
そうですよ……。

女1 四番目の子はどうでした？

女2 女の子でした……。

女1 何やってるんです。

女2 いやそんなこといわれても。

女1 いいですか、私、あなたが五番目を産んだら訴えますよ。

女2 何を言ってるんです。関係ないじゃありませんか。そんなこと……。

女1 関係ない？それじゃあなたは、あなたのくだらないプチブル的な
欲求のために、全世界の食糧事情が危機に瀕しているのを、私に手
をこまねいて見ていろっていうんですか？

女2 そんなに大げさなことじゃないでしょう。

女1 いいえ、大切なことですよ、これは。あなたは今、どれほどのカン
ボジアの子供たちが、飢えて餓死寸前になっているか、知っている
んですか？

女2 まあ、知ってますけどね……。

女 1

何人です？

女 2

何ですか・・・？

女 1

何人ですってきいているんですよ。何人のカンボジアの子供たちが飢えて死にかけているか、あなた今、知ってるって言ったじゃないませんか。

女 2

ええ、でも、数までは・・・。

女 1

二十九万三千六百九十二名です。

女 2

はあ・・・。

女 1

言ってみてください。

女 2

何ですか？

女 1

今、私が言った数です。カンボジアの飢えた子供たちの数ですよ。言えないんですか？

女 2

ええ、だって、今聞いたばかりですし・・・。

女 1

二十九万三千六百九十二名。あなた本当に、この子供たちのことをかわいそうだと思っているんですか？

女 2

そりゃあ、思ってますけどね・・・。

女 1

覚えておいてください。二十九万三千六百九十二名なんですから。二十九万三千六百九十二名ね・・・。

女 2

女1 あなたが、二番目の子が生まれたときにあきらめていれば、このう

ちの二人は飢えなくて済んだんです。

女2 しかし、それとこれとは話が違うじゃありませんか。

女1 どう違うんです？

女2 まあ、いいですよ。ともかく早いとご受付を済ませていただいませ

んか、私もそんなにゆつくりはしてられないんですから。

女1 この子供たちだってそうですよ。

女2 何ですか？

女1 この子供たちだってゆつくりはしてられないんです。明日にも

餓死しようとしているんですからね。

女2 いやいや、それはわかりますよ。わかりますけど……。

女1 今ここに写真がありますから（出して）これです、見てください。

女2 （顔をそむけて）やめましょう。わかってるんですから……。

女1 何故、見ないんです？

女2 いや、見ますよ（やむなく、やや離れて見る）。

女1 手足がこんなに細くなって……。おなかが膨れて……。そんな

んですよ。飢えるとみんなおなか膨れるんです。見えますか、こ

れ……。この口のところに……。ハエですよ。ハエがたかっている

んです。この子たちには、もうこれを追っ払う力もないんですよ……。

女2 ええ……（ふと何気なく）しかしこれ、カンボジアでなく、コンゴの子供たちじゃありませんか……？

女1 ええ、そうですよ。これはコンゴです。でも、カンボジアだって同じことですよ。飢えた子供たちというのは、みんな同じなんです。それともあなた、コンゴの子供たちなら可哀そうじゃないって言うんですか？ あ

女2 いえ、そんなこと言ってやしないじゃないですか。私はただ、コンゴかなって思っただけなんですから……。

女1 ひどいと思いません……？

女2 まあ、思いますけどね……。

女1 何とかしてやりたいとは思わないんですか？

女2 そりゃあ思いますけど、しょうがないでしょう、思ったって……。

女1 あなたは、この子供たちにカンパをしましうって呼びかけても、素通りしてしまうんですか？

女2 いや、そういうことがあれば、それは何がしかのものは出しますよ。出来る範囲内のものはね。しかし、たとえそのくらいのことをした

ところで……。

女 1 じゃあ、カンパしてくださるんですね？

女 2 何ですか……？

女 1 だって、あなた今、カンパしてくださるって言ったじゃありませんか、飢えた子供たちのために……。

女 2 そりゃあ、まあ、言いましたけど……。^{ええ、}ここでは、そういうこともやっているんですか……？

女 1 藤、ここではありません。(電話機をとって番号をまわし始める)
この三階に、そういうものを受け付ける事務所があるんですよ。^{あんな校舎、}

女 2 でも、ちょっと待ってくださいよ。

女 1 カンパ、なさらないんですか？

女 2 いや、しますけども、私はとにかく……(やや不安になってあたりを見回し)ここは、ヨシダ博士の神経科の相談室じゃないんですか……。

女 1 大丈夫。^(線格)電話しとくだけですから……。 (電話に) あ、タカコさ

ん、私。ええ、そう。え？ いえいえ、そうじゃなくてね、今ここに
見えたお客様に私、カンボジアの可哀そうな子供たちのお話をし
たの。そつしたらその方がひどく感動なさってね……。 いえいえ、

車

女2 どういたしまして……。それでね、その方が是非その子供たちに
カンパを……。ええ、そうなの……。

女2 あの……。少しですよ。そんなに沢山は、何ですからね……。

女1 (女2に)何ですか……？

女2 ですから、私、今、持合せもありませんから、少しですよ、
その……。カンパできるのは……。

女1 わかってます。(電話に) ええ、じゃあね、さよなら……。 (女2
に) このカードに名前と住所を書き込んでください。……あなた、

眼鏡かけないんですか？

女2 眼鏡？ええ……。

女1 目がいいんですね？

女2 いいってことはありませんが、まあ、普通ですよ……。

女1 でも……。失礼ですけどあなたおいくつです……？

女2 五
四十五ですが……。 (書き終わる)

女1 五
四十五で眼鏡かけないなんて、普通じゃありませんわ。よっぽどい
いんですよ、その目は……。(笑) まあ、大変……。私、電話しとかな

くちや……。 (受話器をとろつとする)。

女2 (慌ててその手を押さえて) ちょっと待ってください。何ですか、そ

の電話っていうのは・・・？

女 1

(手を放して) なんでもありませんよ。アイバンクのことですか

ら・・・。

女 2

アイバンク・・・？

女 1

この中二階に、私設のアイバンクの事務所があるんです。小さな所

ですが、いかがわしいものじゃありませんよ。ちゃんとしたルート

があつて、手術するのは大病院の一流のお医者さんたちなんです

からね・・・。

女 2

何ですか、それは・・・？

女 1

ですから・・・あなた角膜移植のことを知らないんですか？

女 2

角膜移植？知りません。

女 1

簡単に言いますとね、この・・・目の中に角膜つてものがあるんで

す。それを移植するんです。

女 2

何故・・・？

女 1

何故つて・・・ですからね、最後まで聞いてくださいよ。今、世界

では角膜がひどく不足しているんです。困ったことですよ。だって、

角膜さえあれば手術して目が見えるようになる子供たちが、それ

こそびつくりするほどたくさんいるんですからね。つまり、アイバ

ンクというのは、そうした可哀そうな子供たちのために、みんなから角膜を寄付していただいて……。

女2

お断りします。私は駄目ですよ……。

〈立つ〉

女1

駄目って……最後まで聞いてくださいって言ってるじゃありませんか。その可哀そうな子供たちは、いいですか、生まれてこのかた、一度も青空というものを見たことがないんですよ。

女2

ともかく、その話は駄目です。私はいやですよ。

女1

だって、片目だけでもいいんですよ。^{大それた女2「あ。」}片目だけでも寄付してください

れば、その子はその片目で青空を見ることができんです。野原も、^{女2「あ。」}

タンポポも……。

女2

よして下さい。もうその話はやめましょう。私はいやだって言ってるじゃありませんか……。

女1

だから最後まで話を聞いてくれって、さっきから何度も言ってるじゃありませんか。^{女2「や、ただその話は……」}あなたが、アイバンクに角膜を寄付するのは、

あなたが死んでからです。

女2

死んでから……。

女1

生きているうちは、あなた自由にお使いになっっているんですよ。だってそれ、あなたの目なんですからね。

女2

そうですか・・・。

女1

そうですよ。ですからあなたはただ、死んだらこの目を寄付いたしますって書類にサインをしてハンを押すだけなんです、今は・・・。

女2

ああ、今はね・・・。

女1

それなら、構いませんか？

女2

ええ、まあ、それなら構いませんけれども・・・。

女1

電話しますよ。

女2

いやいや、ちょっと待ってくださいよ。

女1

何故です？

女2

いえ、ですからね、ちょっと考えさせてみてくださいませんか。

女1

何も考えることなんかありません。とまあ、その時あなたはもう死んじやっているんですよ。死体なんです、あなたは。アイバンクは、その死体から目をえぐるんですから・・・。

女2

えぐるんですか・・・？

女1

いえ、ですから、大病院の一流のお医者さんたちがやるんですから

女2

ね、そんな乱暴なことなんてするわけじゃないじゃないですか。
クリ
クリと
わかりました。ですからこういうことにしましょう。とにかく私、
今夜一晩考えてみますから、その上で明日・・・。

女 1 何を考えるんです、一体……？

女 2 だって、私の目ですよ、これは、少なくとも……。

女 1 だから、自由にお使いくださいって言ってるじゃありませんか、私

は……。使っちゃいけないなんて一言も言ってやしないんです。

ただ、死んだらもう使い道はないんですからね、それをちょっと利用させてもらったって構わないじゃありませんか。そうでしょ？

死体に目なんかついてたつてしょうがないじゃないですか。

女 2 そりゃあ、まあ、そうですね……。

女 1 決心なさい。こんなこと、くよくよ考えるべきことじゃありませんよ。悪いことじゃありません。それで可哀そうな子供たちが救われるんですから……。電話しますよ（ダイヤルを回す）。

女 2 でも……

女 1 それに、書類にサインをしますと、アイバンクから目薬を一本もらえるんですよ。もちろん、ただでね。目を大切にしてくださいって……。 （電話に） もしもし、ハナエさん……。？ 私よ。早速ですけどね、今こちらにお客様がいらして、ほんの話のついでに角膜移植のことが出たら……。え？ まさか……。そうしたら大変感動なさってね、そうなの、それでぜひ角膜を……。ええ……。いえ、今

はね、ご自分でお使いになるんですって……。ええ、私が案内しますから……。そう……。じゃあね（受話器を置く）。

（女2に）実はその……残った死体のことなんですけどね……。

何ですか、残った死体って……。

ですから、あなたの……その……目をとっちゃったあとの死体ですよ。

それが……。どうかしたんですか……？

死んだらその死体を大学病院に寄付して、解剖を……。
女2 いい加減にしてください！
女1 やぱり？

いやです。

待ってください。まだ最後まで話をしてないんですから。

いいえ、いやですよ。私は、そういうことは駄目なんですから……。

とにかく、聞いてください。いいですか、今、大学病院では、解剖

用の死体がものすごく不足しているんです。

不足しているといまいと、とにかく私はお断りしますよ。

じゃあ、こうしましょう。この四階に、安楽死協会の事務所があり

ましてね……。

冗談じゃありませんよ。いいですか、私が今、ここに何をしに来ているか知っていますか？そうでしょう？ここはヨシダ神経クリニ